

## 第十二回国際チベット学会報告

望 月 海 慧

はじめに 平成二二年八月にカナダのバンクーバーにあるブリッティッシュ・コロンビア大学で開催された第十二回国際チベット学会に参加した。筆者の研究領域は、近年、チベット仏教に移行しているものの、もともとはインド大乘仏教を研究しており、チベット学研究者としてはまだビギナーである。それ故に、国際チベット学会についても、今回が初めての参加である。もちろん前回のドイツのボンでの学会、ハンブルク在任時にグラーツでの学会、さらには研究者としてスタートした時の成田山での学会など参加する機会はこれまで何度もあった。もちろんディーパンカラシュリージュニャーナ研究はチベット仏教の範疇に入るのであるが、インド仏教思想

史の流れで位置づけてみたいと思っていた。またチベット仏教独自の文献を扱っていないことにも、躊躇の理由があった。しかし、チョナン派の研究で科学研究費の助成金の交付を受けたこと、*Acta Tibetica et Buddhica* のパブリシティも考え、出かけてみることにした。

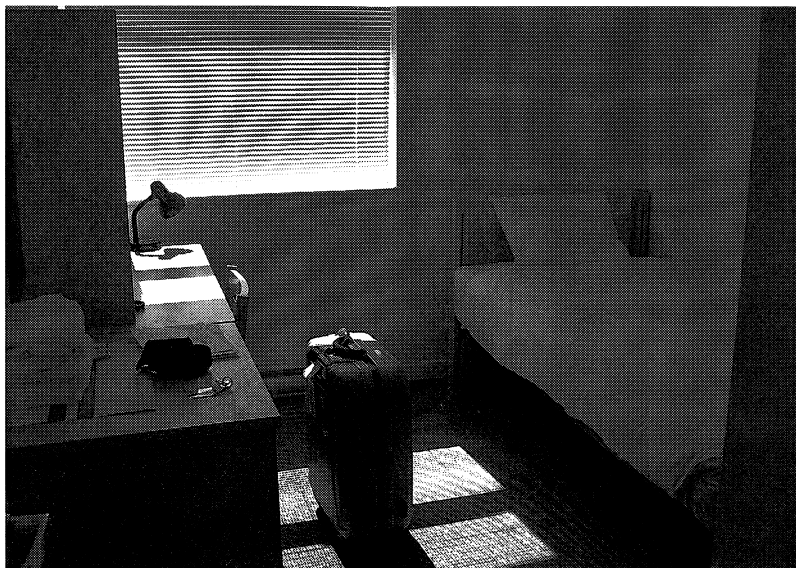
前月に、久間泰賢先生（三重大学）を研究代表者とす  
る「ヴィクラマシーラ・プロジェクト」の会議と第三回  
国際タントラ研究会への参加のためにハンブルク大学に  
出かけたばかりで、引き続きの出国となった。

八月一五日 前日に檀家の棚経をすませてから、身延を  
発つ。大寺の住職であるならば、参加不可能な時期であ

ろうが、自坊が小寺なものも、このような場合に幸いである。成田からバンクーバーへの直行便を選択したため、知り合いの方々もいるかと思うと、搭乗の際に斎藤明先生（東京大学）が声をかけてくれた。

バンクーバーに着いて、空港からタクシーで宿泊先である大学のレジデンスに向かう。ほどなく到着し、レセプションを探すのに手間取るも、部屋に落ち着いた。レジデンスは三棟の高層の建物と中層の建物からなる。部屋は共同のダイニング・キッチンに二つのバスルーム、三つの個室からなる。個室はベッドと学習机が備え付けられており居住環境の充実度は高いものである。

ブリッティッシュ・コロンビア大学は二度目の訪問である。前回は、タコマでの学会の際に、シアトルから車で北上してノースカスケード国立公園を観光して、カナダに入国し、バンクーバーの市内に入る前に立ち寄った。その時の記憶から大学の中心を把握しているので、まずはそこに向かって昼食をとることにする。するとアジア



寮の個室

文化紹介のイベントのため、多くのアニメーションのコースチューム・プレイヤーが集まっていた。残念ながらこの領域の研究は全く行っていないので、イタリアンのピザを食べて退散する。

バス停に向かい、ダウンタウンに出かける。丁度停車しているバスの運転手に行き先を聞いてみると、ダウンタウンに向かわないと言われるものの、乗客が親切に乗り換え先を教えてくれた。ロブソン通りを歩いてみるものの、疲れてしまい、ギヤス・タウンやチャイナ・タウンを再訪する元気もなく、夕食を購入して戻ることにする。

大学に戻るバスを探し出すものの、コインがないために乗車拒否されてしまう。言い返す元気もなく、売店を探して小銭を作り、次のバスで戻る。以後、帰国の際まで、大学の敷地から出ることはなかった。アトランタのエモリー大学での国際仏教学会の時もそうであったが、ヨーロッパの大学と異なり、北米の大学は、広いキャン

パスにすべてが備わっているのだが、ダウンタウンへのアクセスが容易ではないように思える。

八月一六日 学会初日である。ジェットラグもなく目が覚め、朝食を取りに学食に向かう。同じく朝食に向かう小野田俊蔵先生（仏教大学）と会い、一緒に朝食を取る。代金は学会参加費に含まれているが、メニューはトースト、ポテト、ベーコン、フルーツなど連日同じものであった。

開会式の会場の確認もしていなかったのだが、小野田先生の案内で、広いキャンパスを迷うことなく、フレデリック・ウッド・シアターに向うことができた。総会会場に入るところで、チャ・サンギョブ先生（金剛大学）と再会した。

開会式後に発表が行われる教室棟に移動した。初日の発表は「保護と復興」「東チベットにおける仏教徒の空想と彼らの修行」「古代チベット研究Ⅲ」「チベット文献

への貢献―テキストとジャンルと一般的用語」「チベット人類学の状態―過去の窮地と新たな方向」「イポリット・デジデリとチベットへのカトリック伝導に関する近年の調査」「高等教育における第二外国語としてのチベット語の教育と学習」「チベットの西洋認識」「チベットにおいて応用されたスカラシップ」「チベット史―政治と法律」「現代モンゴル初期の仏教の伝統への接近―一九三〇年以前のテキストとイメージ」の一一のパネルにおいて八〇の発表が行われた。これらのタイトルからみても、仏教学研究に偏らないチベット研究の多様性が明らかである。しかしながら筆者の興味は仏教であるため、「チベット文献への貢献」に参加する。発表は次の通り。

ジム・ラインガンス「チベット仏教における著作集―その編纂と改訂と構成と分類ジャンルとしてのその利用」

ピーター・フェアハーゲン「チベット翻訳官の仕事―道具」

ララ・ブライトスタイン「歴史を作る? ドリンパ・テンジン・ペルジョルの伝記を読む」

ウルリケ・ルスラー「文献の分類か、知識の系統立てか? チベット文献における分類ジャンルに関する一般の見解」

ロジャー・R・ジャクソン「借用された文献と流動的ジャンルと遂行的表現の認可―ゲルク派の供儀に関する熟考」

これらの発表を通して、チベット蔵外文献の分類の必要性を再認識する。これまでは高僧の著作集などを中心に文献が紹介されてきたが、さらに仏教に関係するものだけでも文法用語集、伝記文献、儀礼文献など多くの文献がまだ十分に整理されていない状況である。そのようなことを考えながら、前日のコスプレ会場の地下で、中華の酢豚で昼食をとる。

午後の前半も同じパネルに参加し、次の発表を聞く。

フォルカー・カウマンス「チベットとブータンにお

けるパンチェン・シャーキャチョクデン（二四

二八一―一五〇七）の『著作集』

ジャコメラ・オロフィノ「古代ギリシャからチベッ

トへのトリックスターの長旅」

エカテリーナ・ソブコバク「ロンドル・ラマの『芸

術・医学・占星術に関する用語の一覧表』に関

する知識領域の分類」

トリックスターなどと聞くと、「平成の時代にまだカー  
ル・グスタフ・ユングとチベットか」などと思っていま  
うが、ギリシャ神話との比較である。民話と神話の比較  
による物語の普遍的テーマを考察するものであるが、あ  
まり重要性を感じない。それに比べ、ロンドル・ラマの  
用語集は、とても有益なものと思われ、早く使い易い形  
で一冊欲しくなってしまう。

休憩の後は会場を変え、「古代チベット研究Ⅲ」で次  
の発表を聞く。

岩尾一史「敦煌出土のチベット語『十万頌般若経』

について」

パサン・ワンドゥ「中央チベットからの王家の資料―

いくつかの新発見」

ロバート・メイヤー「敦煌文書 (IOL Tib J321)

により保存された『聖なる方便の綱の蓮華蔓の

撰義釈』へのパドマサンバヴァのあり得る貢献」

『十万頌般若経』だけでなく、大乘経典のチベット語  
訳の蔵外資料の重要性については以前より指摘されてい  
る。『法華経』も含めて、これらの経典のチベット語訳  
の位置づけをまとめて、チベットにおける訳経史を解明  
することも重要である。また敦煌文書については、近年、  
国際敦煌プロジェクトや東京外国語大学の星泉先生によ  
りウェブ上で画像データや電子データが利用可能とな  
り、今後さらなる成果が期待できる。

夜は人類学博物館で歓迎会。アメリカン・インディア  
ンの歴史文化を学ぶために博物館を見学の後、海岸沿い  
の大型テントに移動する。映画のセットのようなところ



### 総会が開かれたシアター

で、夕日を見ながら、前月にハンブルクで会ったばかりのドルジ・ワンチュク教授らと食事をとり、楽しい夕べを過ごす。また漢人のジャーナリストとも知り合い、チベット学がもつ複雑な現状も再認識する。

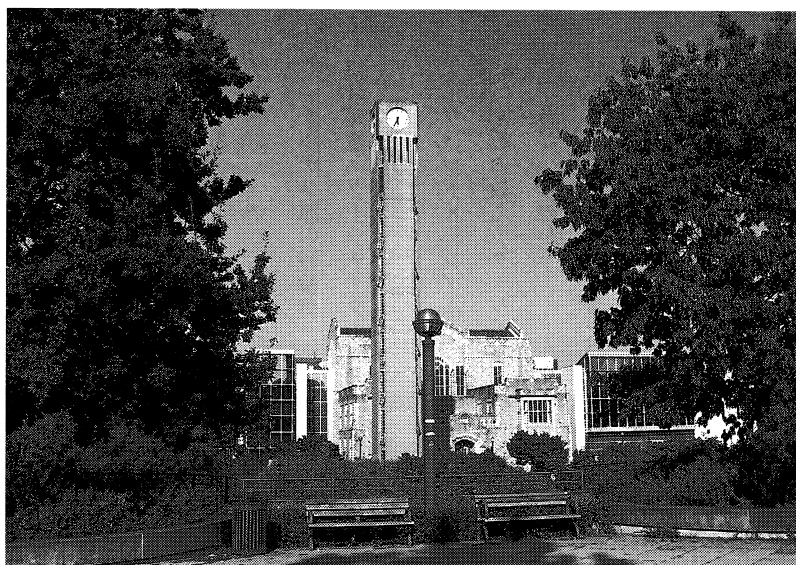
八月一七日 第二日目は総会としてチャールズ・ランブル座長の下で、

ジン・スミス「チベット仏教リソース・センター」  
アンドレ・アレクサンダー「歴史的チベット建築の  
ための委員会」

ヤン・エンホン「中国社会科学学会」

デイヴィッド・ジェルマーノ「ヴァージニア大学チ  
ベット・ヒマラヤ図書館」

の発表が行われた。連日の朝の全体セッションとしてホールで重要な発表が行われることは、参加者にとって有益である。この日も、ジン・スミスの仏教学研究に対する大きな貢献を確認する。また年末に届いた氏の計報は、



時計台とメイン図書館

チベット学におけるとても大きな喪失である。

続いて、パネルとして「チベットにおける中観の歴史に向けて」「チベットの収集品―博物館と実在品と記憶」「歴史と文化」「ボン教と仏教の伝統における癒しのための儀礼の利用」「チベット地域における発展の中の社会政治と経済と環境の変化」「アムド地方史」「社会と共同体」「チベット国境における権力と抵抗」「女性宗教修行者たち」「チヨナン派―物語と伝承と伝統の再考」「現代的対話―チベットにおける議論と会話と討論」「チベットの碑文」「宗派の接合―伝承体系の創造的過程」「壁画」の一四のパネルにおいて九一の発表が行われた。筆者の興味は「チベットにおける中観」であるが、もちろん自らの発表が行われる「チヨナン派」の部会に参加する。そこでは、マイケル・シーヒーが座長となり、次の発表が行われた。

マイケル・シーヒー「サンウエイ・イエーシエを明らかにする―女性チヨナン派熟練者ジェツン・

ティンレー・ワンポ（およそ一五八五—一六六八）の自伝の反映」

ゾラン・ラゾヴィッチ「クンガー・ドウルチョックの『チヨナン百注解』—ある仏教修行教示者の自伝」

ウルバン・ハマー「ターラナータの『時輪法集』—チヨナン派の時輪史」

望月海慧「ターラナータの『中観最乗論』第三章について」

デイヴィッド・テンブルマン「インドからの最後の密教の教え—ターラナータは文献の欄外の犠牲者だったのか」

ただし第二番目の発表者の欠席は事前に知らされており、行われなかった。筆者の発表については、そのタイトルの特長の内容を記さなかったのは失敗だった。「如来蔵」と言う内容だと他のパネルの可能性もあったのだから、チヨナン派とターラナータにとっての『時



研究発表が行われた教室棟



輪タントラ』の重要性を再確認できただけでも有益なパ  
ネルであった。

また自身の発表の際に、ブリティッシュ・コロンビア  
大学の飯田昭太郎先生のことについて述べさせていただ  
いた。残念ながら生前にお会いする機会はなかったが、  
丁寧な手紙とご著書を頂いたことがある。先生は身延山  
大学の前身である専門学校の時代の三賢人の一人である。  
今回の発表がもう一人の賢人である中村瑞隆先生が専門  
とした如来蔵思想に関するものであり、今回の発表のモ  
チベーションは高いものであったはずである。

発表後は、いつものフード・コートのテイクアウトの  
寿司で昼食をとった後、午後は「チベットにおける中観  
の歴史に向けて」のパネルに参加。発表は次の通り。

トーマス・J・F・ティルマンス「チベットにおい  
て第三・四レンマで何か起きたのか」

ヤエル・ベントール「創造の段階での空性の瞑想に  
関する論争」

第十二回国際チベット学会報告（望月海慧）

ドナルド・ロペス「デジデリとトンワ・ニー予備的  
研究」

イ・ヨンボク「ツォンカパの『入中論釈』における  
否定対象の識別をめぐるデプン寺のゴマン学堂  
の新旧教科書の議論」

ジョナサン・ストルツ「中観の地位をめぐるゲンドウ  
— 真理と知識と証拠 —

このパネルの座長はヴァージニア大学のジェフリー・  
ホプキンス教授であり、個人的印象として今回の学会の  
主役のような印象を感じた。教授の『空性に関する瞑想  
(*Meditation on Emptiness*)』や、ミシガン大学のロペ  
ス教授の『自立論証派の研究 (*A Study of Satantrika*)』  
などの著書は、私が研究を始めた頃に読んだものである。  
久しぶりの再会の挨拶をし、あの頃の学問に対する情熱  
を思い出す。

学会を終えて、広い学内探検も含め東のユニバーシティ・  
ヴィレッジの商店街まで散歩をする。アジア食品店で買



有名なレック・ビーチ

い物をし、インド・カレーを食べる。食後もまだ明るいので、寮近くにあるビーチに出かける。寮の近くに大きな駐車場があり、多くの海水浴客が出入りしているのが気になっていた。海岸まで下ってみると、多くの裸体の中に、チベット僧も混ざって、夕日を眺めていた。翌日に友人に聞いたところ、ヌーデイスト・ビーチで有名な浜だそうである。

八月一八日

本日も総会として、

ジャネット・ギャツォ「人法の倫理―チベット仏教

以前と内部と彼方」

ツェヤン・チャンゴパ「ゴンタン地方国のラサ・リ

ンチュエンツォに関する予備的注記」

シエン・ドウ「尊者とチャンチュブ・ウの七つの質

問」

タシ・ツェリン「レマン・ケンラブ・ノルプ―彼の

### 略伝の注記と著作の短い議論

の講演が行われた。三番目のものはアティシヤの『菩提道灯論』に関するものである。ロサン・チューキゲルツェンの同論に対する注釈を見ると、この七つの問いに関する解釈が複数存在したことがわかる。

続いてパネルとして「チベットのための自己決断—近年の展開」「チベット学図書館とアーカイブ資源—専門分野の状況と必要な技術」「カム—強烈な接触地域—カムパ地方」「文献と社会的メティア」「仏教文献と思想」「チベット氏族」「聖なる狂人—対比する展望」「保健治療」「政治経済と空間の生産」「中国におけるチベット仏教」「チベット情報工学」「文献的・論弁的芸術」「ソワリグバからチベット医学へ?—伝承と変容」「チベット人—アムドにおけるムスリムとの関係の過去と現在」「古典文献」「ボン教の共同体と機関と相承」の一六のパネルにおいて一〇五の発表が行われた。

教室を移動する際に、書店にて法数の辞典とパンチェ

ンラマ一世の著作集を購入したため、重い書籍を抱えて寮に一度戻る。急いで教室に戻り、「仏教文献と思想」に参加する。発表は次の通り。

熊谷誠慈「『自性空』の論法のインド仏教からチベット

ト仏教とボン教への展開—「四大理由」なのか

「五大理由」なのか」

アンドリュウ・マクガリテイ「インドとチベットの

中観論者による縁起と因縁施設の理解」

斉藤明「バヴィヤによるサーンキヤ学派の影像論批

判」

ツルティム・ケサン「ブツダと如来の見解の成就に

入る条件と意義」

これらの発表からも、チベット仏教を学ぶためにはインド仏教の専門的知識が必要条件となっていることがわかる。インド仏教文献における他学派との論争がチベット仏教における議論の前提に存在しており、そのようなものはゴータマ・ブツダまでも遡る。それ故に「チベッ

ト仏教研究者はチベット仏教文献だけを読めばいい」などと言っているのではないのである。

昼食にアメリカンのハンバーガーとチップスをとった後、午後は「チベット学図書館とアーカイブ資源」のパネルに参加する。発表は次の通り。

ペマ・ブムとクリスティーナ・デイ・リアッコ「ラツェ図書館」

ジーン・スミスとジェフ・ヴァルマン「チベット仏教リソース・センター」

ステイヴン・ワインベルガー「チベット・ヒマラヤ・デジタル図書館」

このようなウェブ図書館の情報はとても重要であり、研究のツールとして利用価値はとても高いものである。自らの研究を効果的に進めるために利用するだけでなく、研究プロジェクトによる新たな総合研究の創出・研究成果の普及リシティさらには、研究の波及効果をもたらすことなどを含めて、重要な情報を得ることができた。も

ちろん研究助成の獲得戦略を考える上でも、重要なヒントが得られた。

休憩の後に教室を移動し、「古典文献」のパネルに参加。発表は次の通り。

スダン・シャキャ「ナーマ・サンギーティ」の十二音韻の解釈

チャ・サンギャブ「シネペリ」の役割と意義

槇殿伴子「ニンマ・ギユブン・カルチャク」における秘密マントラの合成的システム教義のカトク・ゲツェ・マハーパンディタによる提示

ヴィクトリア・スジャータ「パボンカバ・デチェンニンポのシングル―彼の詩的技術の分析」

トウペン・クンガ・チャシャブ「エガン・パデルにより編集された『一般教義の心髄』と呼ばれる古文獻」

金剛大学のチャ先生の発表はチベットの『牧牛図』に関するものであり、日本の先行研究も踏まえたものであ

た。日本語は読まないというような西洋の学者には、このような姿勢を見習ってもらいたいと感じてしまう。楨殿先生の発表は、彼の大中観説に関するものであり、その後のリメ運動への影響も含めて、とても興味深いものであった。

発表後は寮に戻り、前日にアジア食品店で購入したものをキッチンで調理する。その後、次の論文資料のためのテキスト和訳を行っている、火災報知機が鳴り響いた。隣人らと非常階段を下ると、消防車もやってきた。誤作動のようであったが、そこには昼間では見られないような姿の先生方が集まっていた。

八月一九日

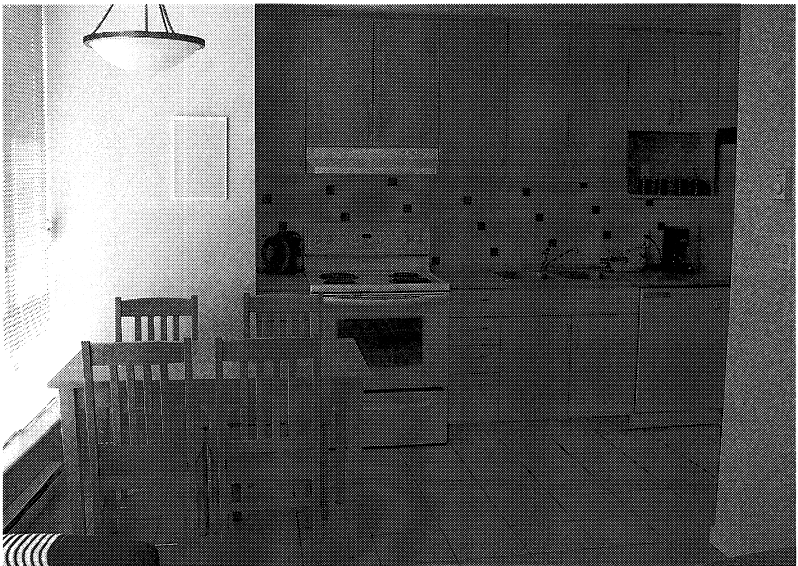
個人的には最終日の総会として発表は、

キャロル・マクグラナハン「チベットの戦争画―

『快樂の園』とその他の絵入りの現代チベット

史―

第十二回国際チベット学会報告（望月海慧）



寮のキッチン・ダイニング

ルンテン・ギャツォ「国民総幸福のための教育―仏教思想との相互関係」

チャールズ・ランブル「ネパールのムスタン窟における最近の文献的発見」

の発表が行われた。

パネルでの発表は「自空・他空の歴史―リメ運動を通してその始まりとの相違」「シッキムとブータン―過去と現在」「フーバート・デクレアーを評価する記念パネル」「医学文献」「僧院の歴史」「世界の中のチベット人」「教育」「カンギル研究」「二〇世紀の歴史と国際関係」「宗教と世俗儀礼」「ケサルと民俗伝承」の十一のパネルにおいて六八の発表が行われた。

まず「僧院の歴史」のパネルにおいて、

井内真帆「チベットの仏教共同体の構造における移動による初期カダム派内の変化」

の発表を聞く。カダム派については、ディーパンカラシュリージュナーナを研究する上でも重要なテーマであり、

このような研究の大切さを知る。

その教室に、私の雑誌への問い合わせメールを頂いた研究者がいたので、最新号を渡す。その後は「自空・他空の歴史」のパネルに移動する。発表は次の通り。

クラウス・ディーター・マテス「ケンチェン・カン

シャルワンポの他空説のリメ運動への貢献」

カール・ブルンヘルツル「カルマパ八世の他空説」

アン・バルディ「僧院と条件づけられた心はどの

ようにして他空説に不可欠になりうるのか」

ダグラス・ダクワース「他空説の根拠の反響」

デイヴィッド・ヒギンズ「ロンチェンパの『心知問

答論』の主題の概観」

最初の発表は聞けなかったが、今回の学会の仏教学的テーマの主題は他空説であるような印象をもった。ゲルク派のツォンカパでもなく、サキャ派のサパンらでもなく、この非主流的な思想の解明が流行になることは、研究が次の段階にステップアップしたことを意味するであ

ろう。もちろん主流派の中にも他空説を取り入れた学者がいたことから、チベット仏教史においてもすでに重要なトピックスであったのだが、チベット仏教思想史を総合的に捉える段階になっているように思える。

お昼は、井内先生ら若い日本人研究者と中華を食べる。今回の学会への日本人参加者は、私よりも下の世代の学者が多かった。日本人の今後のチベット学への貢献が期待できるだけでなく、彼らを援助してやりたいと思うと、そのような歳に自分になってしまったことに悲哀を感じてしまう。

午後も「自空・他空の歴史」のパネルに参加する。発表は次の通り。

ツェリン・ワンチュク「他空説の直接伝承の研究」  
一三、一四世紀のチベットにおける仏性論に対するリンチェン・イェシエの解明」

アレクサンダー・ヤノポロス「他空説の権威と信頼性——トゥルプバの『現観莊嚴論釈』における他

#### 空説へのインド資料

ヤロスラヴ・コマロフスキー「それは他空説あるいは良い古瑜伽行か——五世紀チベットからの他空説の流動的ヴァージョンについて」

これらの発表の後に、参加者すべての討議が行われた。そこで話題になったのが、他空説のインドにおける源泉についてであった。『小空経』やマイトレヤの論書にその思想的基盤を求めることが議論されていたが、個人的にはラトナーカラシャーンティやディーパンカラシュリージュニヤーナにも同じような思想背景を感じており、インドとチベットの直接的な影響関係の可能性について考察してみたい。

発表終了後、斉藤明先生と小野田俊蔵先生とで、新渡戸記念庭園を回って行くも、残念ながら閉園していた。その後、ノン・ヤング・チベットロジストで、寮の隣のレストランで最後の晩餐をとり、リラククスした時間を過ごす。

八月二〇日 学会最終日は午前中の発表のみである。総会において、

ティモシー・ジェイムス・ブルック「IATS 2010の

反響」

として学会のまとめが行われた後に、パネル発表として「チベットの外縁―テキスト的、概念的、物理的」「言語学」「タントラとタントラ修行」の三つのパネルにおいて一一の発表が行われた。

残念ながら月曜日の授業をもう一週休講にするわけにはいかないのです、最終日に参加することなく帰国の途に就く。朝食後にチェック・アウトをし、一昨年のアトラントでのごとがないように、前日に予約したタクシーにて空港に向かう。結局、学会が始まって以来、学内を出るのはこれが始めてである。

今回の学会では、五五のパネルで三五〇を超える発表が行われた。世界中から学者が集まったからであるが、



レジデント



日本西藏学会がマイナーなイメージなのに対して、大規模な学会であったという印象が強い。もちろん大きければいいというものではないが、自分の研究方法に対する反省も含めて、日本のチベット学研究にもさらなるバラエティが必要とされているような気がした。学会の詳細については、アジア研究所のサイト (<http://www.iar.ubc.ca/programs/ctsp/iats.aspx>) からアクセスできる。